

熊本市の古墳の被害状況

三好栄太郎（熊本市役所）

1. はじめに

熊本市には指定文化財が256件⁽¹⁾あり、そのうち熊本地震で被災したのは70件である（平成28年11月1日現在）。その中には、大々的に報道されている熊本城や全壊してしまった洋学校教師館（ジェーンズ邸）など、見るに堪えない光景のものも少なくない。ここで報告する釜尾古墳も墳丘が崩落し、ショッキングな姿になっている。さらには当然のことながら、損害を受けたのは指定されたものばかりではない。いわゆる「未指定の文化財」も数多く被災しており、256分の70では表すことができない文化財の被災状況がある。

被災文化財が多いために、熊本城など大々的に報じられているもの以外の損害は案外見えにくくなっている。ここでは、熊本市の被災古墳の中でも被害の大きかった釜尾古墳、石之室古墳の2基を取り上げ、少しでも多くの方に被害状況を知っていただきたいと思う。

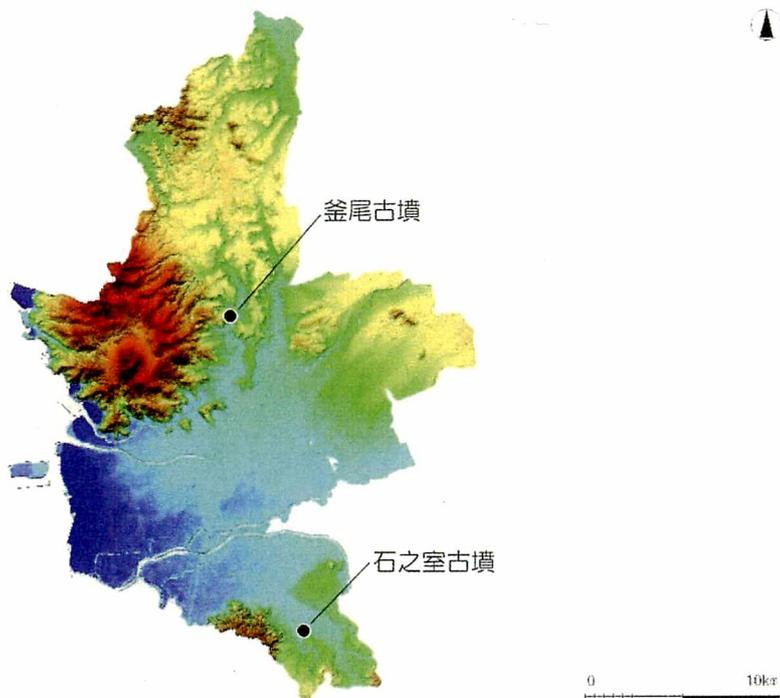


図1 釜尾古墳と石之室古墳の位置図

2. 釜尾古墳

(1) 概要

i) 古墳の位置

釜尾古墳は熊本市北区釜尾町字同免に所在している。金峰山の東麓にあたり、井芹川を望む釜尾丘陵の東端に位置する。眺望が非常に良い場所で、周りは神社や畑地になっている。標高は約60mである。

ii) 古墳の内容

指定：国指定史跡（大正 10 年）

墳丘：径 30 m 程度の円墳

主体部：横穴式石室

出土遺物：鉄刀、鉄剣、鉄鏃、挂甲、轡、鉄斧、管玉、須恵器

年代：6 世紀

特記事項：装飾古墳

横穴式石室は複室構造で南に開口しており、総奥行 9.60 m となっている。玄室は奥行 3.25 m、幅 3.35 m と正方形に近い平面形態で、前室は奥行 1.75 m、幅 0.90 m、羨道は奥行 2.50 m、幅 0.90 m である。玄室は奥壁に沿って石屋形があり、左右に 2 区の屍床が設けられているが、原形はほとんど保っていない。なお、墳丘や石室の上部は復元である。

釜尾古墳は装飾古墳として有名であり、玄室の壁は床から約 1.5 m まで赤く、その上は白く塗られている。石屋形の石材や玄門部の天井石などには同心円文や三角文、双脚輪状文が赤、白、青（灰）の 3 色で描かれている。

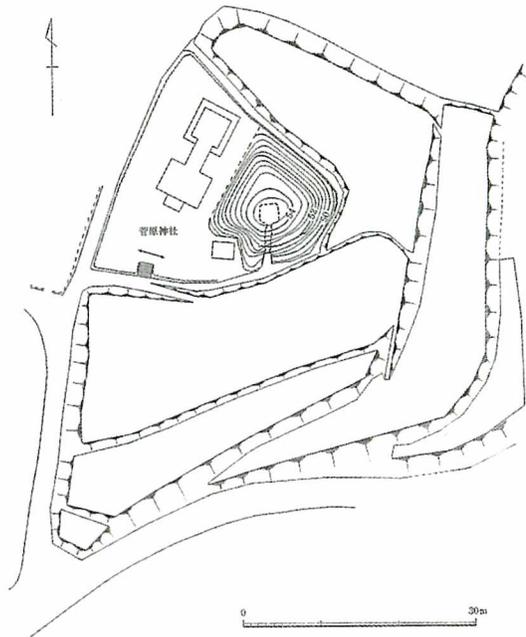


図 2 釜尾古墳墳丘測量図（高木編 1984 より）

発見されたのは古く、明和 9（1772）年に完成した『肥後國誌』によると明和 6（1769）年の春である。ここでは「桔梗ノ紋」（双脚輪状文）があることが注目を集め、石室は近くにあった中世の廃寺である「常福寺ノ粮倉」だろうかと思定されている。加えて、発見後埋め戻したことも記されている。また、天保 12（1841）年に完成した『新撰事蹟通考』にも釜尾古墳の記載がある。大正 5（1916）年には下林繁夫によって釜尾古墳のことが九州日日新聞に掲載され、大正 7（1918）年 1 月に京都帝国大学の調査が行われた。京大調査の報告は大正 8（1919）年である（濱田・梅原・島田 1919）。その後平成 2（1990）年に北部町による発掘調査が行われ、周溝が確認された。それによると径 30 m 程度の円墳と考えられ、須恵器も出土している。平成 20（2008）年 3 月からは熊本市、熊本県立装飾古墳館、京都大学により石室の内部環境の調査を継続して行っている。

iii) 古墳の価値

釜尾古墳が位置している白川下流域には多くの古墳が造られているが、現在のところ確実な前方後円墳は確認されていない。釜尾古墳と同等以上の規模を誇る古墳は羽山塚古墳（円墳・約 40 m）、城山一の塚古墳（円墳・約 35 m）、稲荷山古墳（円墳・約 30 m）程度しかなく⁽²⁾、釜尾古墳が当地域の中でも有力な古墳の 1 つに位置付けられる。

釜尾古墳は装飾古墳として非常に有名である。これは、先述したように釜尾古墳が江戸時代

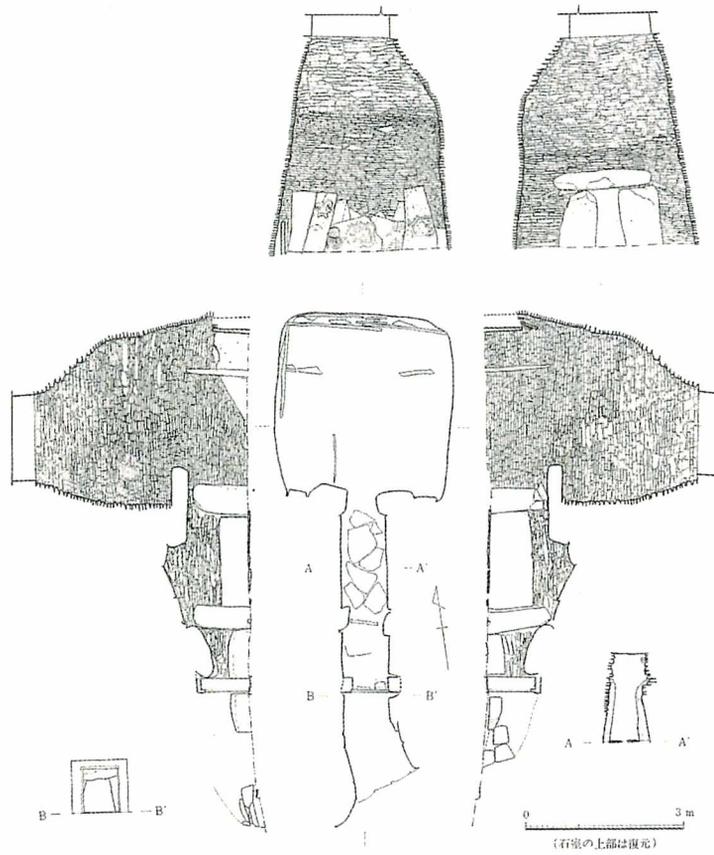


図3 釜尾古墳石室実測図（高木編 1984 より）



釜尾古墳の石室（奥壁と石屋形）

に発見されており、大正時代には京都帝国大学によって調査及び報告書刊行が行われたことと無関係ではないだろう。早くから装飾古墳として古代史研究に重要な資料と報告されるとともに、大正 10 年の第 1 期の国史跡に指定され、それ以後も日本の装飾古墳における代表的存在の 1 つとしてあり続けている。

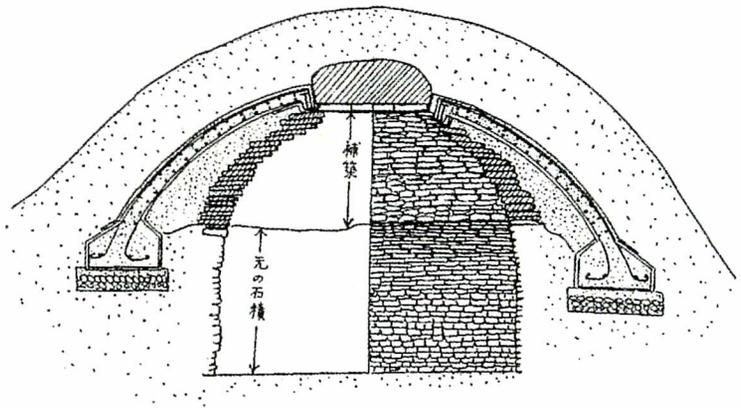


図 4 釜尾古墳補修状況の模式図（乙益 1967 より）

また、装飾では双脚輪状文が特に注目される。双脚輪状文が描かれたものは稀少で、釜尾古墳のほかには熊本市横山古墳、広川町弘化谷古墳、鳥栖市田代太田古墳、桂川町大塚古墳などである。一方、双脚輪状文の形態を埴輪で表現したものもあり、和歌山県の岩橋千塚古墳群などで見つかっている。

釜尾古墳は地域の有力古墳として、また代表的な装飾古墳として大変重要な古墳であるが、それだけではなく、地元を守られてきた古墳であるという文化財としての重要性も非常に大きい古墳である。明和 6（1769）年春に発見された後埋め戻されていた釜尾古墳であるが、江戸末～明治初期に天井が崩落し、大正 6（1917）年 2 月に釜尾村青年団が修理している。それが京大調査時の現状で、簡単な支え柱で崩壊部を支え、内部保護のために柵を設置し入り口に鍵をかけていたという。その後史跡に指定されるに及び、墳丘上に本瓦葺きの覆屋が建てられている。ところがこれが昭和 20（1945）年の台風により大破し、当時の西里村で再建に努めたが終戦直後のことですぐにはかなわず、西里村と文化財保護委員会との共同による覆屋が昭和 26（1951）年の冬に完成した。これは一時的な施設であったようだが、今度は昭和 32（1957）年 8 月の井芹川流域の風水害により覆屋は崩壊し、石室の半分が土砂で埋まってしまう。そこで、当時の北部村が復旧工事を計画し、昭和 42 年に現在のコンクリートドームの覆屋が完成した。現在でも、地元自治会が草刈など古墳の管理を丁寧に行っている。

（2）被災状況

i) 概要

墳丘の崩落・羨道天井石のずれ・羨道に土砂流入・屍床石材の破損・石室石材の散乱

ii) 墳丘の状況

釜尾古墳の墳丘は大きく崩れており、被害が大きい。ただ、釜尾古墳の大部分はコンクリートドームで覆った上に新たに土盛りをしたものであるため、今回の墳丘の崩落は、このドーム上の土がすべり落ちたものだと考えられる。

前震後の点検時には墳丘に亀裂が入っている様子が認められたものが、本震後には墳丘が大きく崩れてしまっていた。石室の入り口は崩落した土砂で塞がれていたが、石室内を調査する際に塞いでいる土砂は除去している。墳丘の更なる崩落を防ぐため、現在は古墳全体をブルーシートで覆っている。

iii) 石室の状況

石室入り口にゆがみが見られることや、内部の安全が確認できないことから、石室内に立ち入った調査は未実施である。しかし、平成28年8月17日に奈良文化財研究所の協力により、小型カメラを用いて内部を確認する調査を実施した。それによると、羨道では天井石が動いているようであり、また土砂が流入していた。玄室では石室石材がパラパラと散乱しており、屍床の石材で割れたものも確認された。石屋形の天井石は玄室壁に立てかけられており、転倒が危惧されていたところであるがそのまま立っていた。小型のカメラを用いた限られた条件での調査であったため、装飾がどのような状態であるかまでははっきりと分かっていない。基本的に石室が大きく崩れてはいないようなので、装飾も大きく直接的に破壊されてはいなさそうだが、地震により古墳の環境に変化が起き、それが間接的に装飾の劣化を引き起こす可能性は想定できる。装飾の詳細な観察が待たれる。

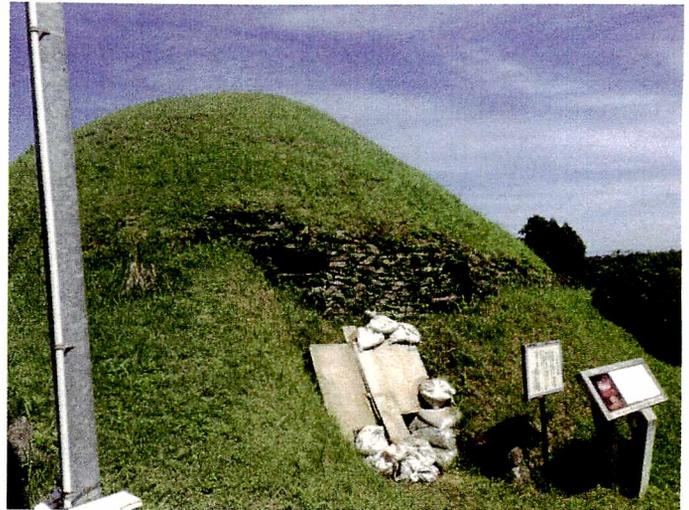
(3) 今後の修復・調査計画と課題

i) 修復・調査計画

平成29年度に熊本市内の被災古墳修復のための検討委員会を立ち上げている。今後委員会と協議していく予定である。

ii) 課題

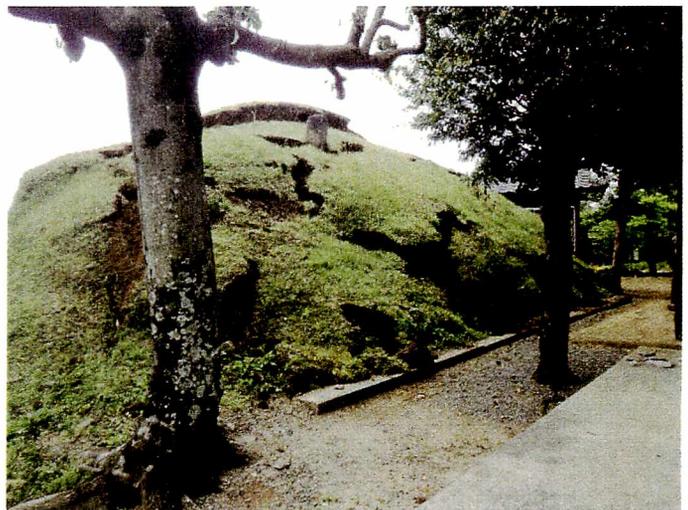
まずは地震による被害の状況を適切に把握しなくてはならないと考えている。例えば、まだ内部の詳細な観察できていないため、装飾の状態、内部環境の変化、石室構造の状態確認などが不十分である。また、釜尾古墳は石室をコンクリートドームで覆って復元した古墳であるが、このコンクリートドームの状態を確認することも必要だろう。加えて、地震の力が古墳にどのように加わって



地震前の釜尾古墳（南西より）



地震後の釜尾古墳（南西より）



地震後の釜尾古墳（北西より）

るかの検証も必要である。

復旧の方法については被害の状況によっても異なってくるであろうが、活用も見据えていきたいと考えている。釜尾古墳は装飾古墳として全国的に著名であり、また地元で大切にされている文化財でありながら、写真以外で石室を見てもらうことができない。現在は様々な技術や方法があるので、石室を見学するような体験を可能にできないかと考えている。

3. 石之室古墳

(1) 概要

i) 古墳の位置

石之室古墳は国指定史跡である塚原古墳群中の古墳である。熊本市南区城南町塚原に所在している。浜戸川の左岸、塚原台地の東端に位置する。浜戸川の対岸には舞原台地があり、前方後円墳である甚九郎山古墳や狐塚古墳が造営されている。石之室古墳周辺野の標高は約 30 m となっている。

ii) 古墳の内容

指定：国指定史跡（昭和 51 年、塚原古墳群として）

墳丘：径 25 m 程度の円墳

主体部：妻入横口式家形石棺

出土遺物：円筒状石製品、鋌留短甲、須恵器等

年代：5 世紀

特記事項：装飾古墳

家形石棺は直葬で、陸橋の延長上である西に向かって開口している。棺身は組合式で、長側石はそれぞれ 2 枚、短側石はそれぞれ 1 枚からなる。内法は長軸長が 2.35 m、短軸長が 1.55 m である。棺蓋は 2 石からなり、奥壁側の石材に片辺 2 個ずつ、計 4 個の縄掛突起が作り出されている。棺底には小さな川原石が敷かれている。棺外の入り口部分には框石のような石材が敷かれ、その両側に立石が 2 枚ずつ、計 4 枚ある。石材は阿蘇溶結凝灰岩である。

装飾は棺身内側に線刻が施されたもので、奥壁と長側壁にある。斜格子状の沈線が施され、その下には横位に 2 重の直線が刻まれている。彩色は認められない。

塚原古墳群は古くから知られた古墳群で、『肥後國誌』や 1784 年に完成した『古今肥後見聞雑記』には塚原村に九十九塚があり、これが村名の由来であると書かれている。昭和 47 (1972) 年から 3 年にわたって、九州縦貫道自動車道建設に伴い塚原古墳群の発掘調査が行われたが、前方後円墳、円墳、方形周溝墓、石棺墓、石蓋土壙墓など 102 基に及ぶ一大墳墓群が検出され



塚原古墳群（清田編 1995 より）

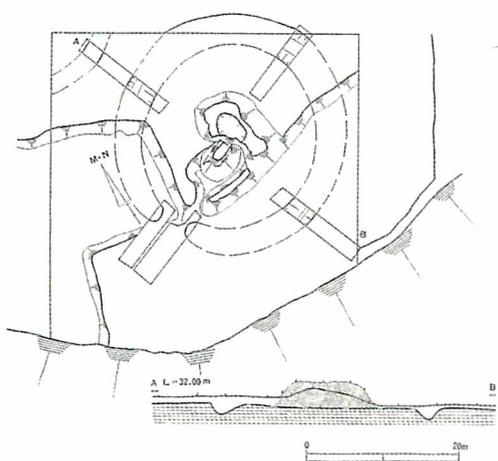


図5 石之室古墳墳丘測量図
(豊崎・清田編 1991 より)

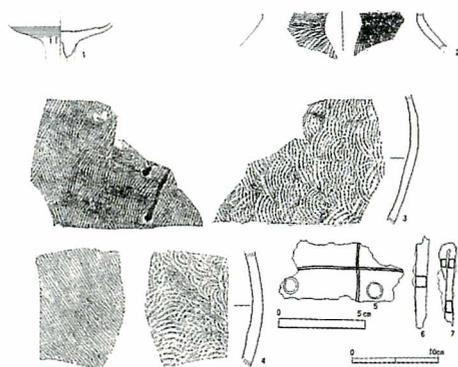


図6 石之室古墳出土遺物測量図
(豊崎・清田編 1991 より)

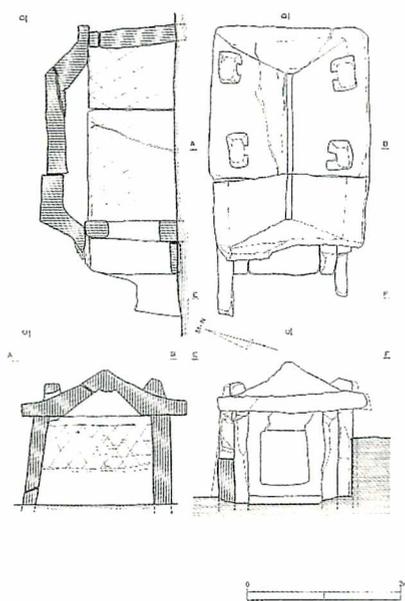
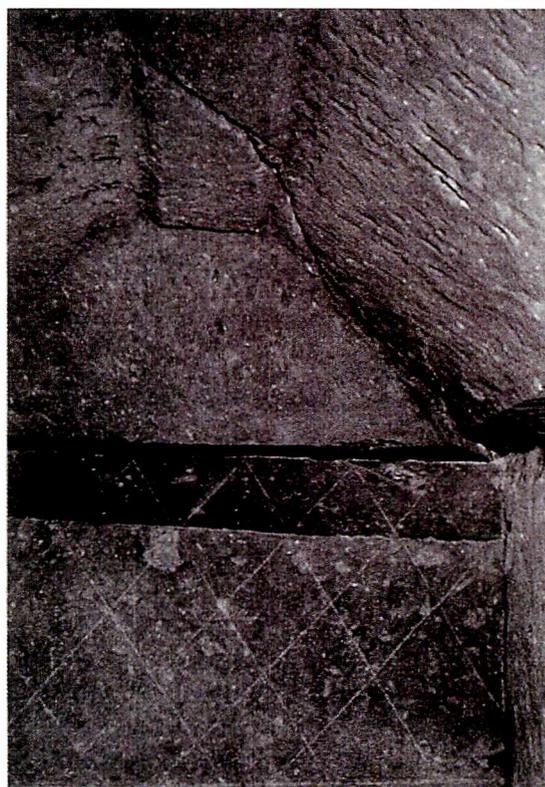


図7 石之室古墳石棺測量図
(豊崎・清田編 1991 より)



石之室古墳の装飾 (松本編 1965 より)

ていった。その規模や構造は九州を代表する古墳群と言えるもので、塚原古墳群の重要性が明らかになっていくにつれて保存運動が展開していった。そして地元の城南町や熊本県が保存を決議する中で国会でも保存が議論・決定され、昭和51年12月には国史跡に指定された。そしてその後も史跡整備に伴い、古墳群の発掘調査を行っている。

江戸時代から知られていた塚原古墳群であるが、石之室古墳には安政の落書きがあり、江戸時代後期から棺の前面が露出していたと言われている。塚原古墳群の調査は九州道建設に伴う発掘以前にも度々行われてきたようだが、古い調査の詳細は不明である。石之室古墳は京

都大学の梅原末治により調査された後『城南町史』編纂の際にも調査を行っている（松本編 1965）。昭和 63（1988）年の塚原古墳群第 8 次調査には、保存整備に伴って再び発掘調査が行われ、墳丘構造などが明らかにされている。

iii) 古墳のもつ意味

石之室古墳の主体部である妻入横口式家形石棺は非常に重要である。棺身が組合式の家形石棺は九州に特徴的な墓制であり、その系譜や歴史的意味が議論されているところである。そしてその中でも特に妻入横口式のものには有明海沿岸に分布が偏ると同時に、石人山古墳（前方後円墳・約 120 m）や石櫃山古墳（前方後円墳・約 115 m）、江田船山古墳（前方後円墳・約 67 m）など、地域を代表する古墳に用いられることも多い。ここからは有明海沿岸の権力者のつながりを見出すことができる。

また塚原古墳群は、前方後円墳や円墳、周溝墓などの様々な種類、階層の墳墓が長期間にわたって築かれた大規模古墳群である。これは、古墳時代にどのように中九州の階層関係が展開していったかを汲み取ることができる貴重な遺跡である。

以上のように、石之室古墳を含んだ塚原古墳群は中九州の古代史解明に欠くことのできない古墳群であり、また石之室古墳の石棺は古墳時代の環有明海における社会情勢を物語る貴重な資料であると言える。

また、現在は公園化され多くの市民の憩いの場になっている塚原古墳群であるが、かつては開発の波にのまれて失われかけたものであり、官民含んだ様々な方面の活動・協力により保存することがかなったものであることも忘れてはいけない。

(2) 被災状況

i) 概要

覆屋にダメージ・妻入横口式家形石棺の倒壊

ii) 覆屋

塚原古墳群は元々その古墳の多くが削平されており、石之室古墳も墳丘が残存していなかった。そのため、現在見ることができる墳丘は整備工事で復元されたもので、内部には鉄筋コンクリートの覆屋がある。地震直後には覆屋にはダメージがなかったと見ていたが、そののち覆屋の破片が少量石棺周辺に飛び散っていることが確認され、鉄筋コンクリートの覆屋にもダメージがあったことが明らかとなった。

iii) 石棺

地震では妻入横口式家形石棺が倒壊し、大きなダメージを受けた。入り口部分の短側石、立石が倒れ、蓋石が転落している。蓋石の転落に伴い、棺身内側の装飾が損傷している可能性もあるが、危険性が高いため中に入って視認することはできない。元々横揺れに弱い構造であったと考えられる。

(3) 今後の修復・調査計画と課題

i) 修復・調査計画

平成 29 年度に熊本市内の被災古墳修復のための検討委員会を立ち上げている。今後委員会と協議していく予定である。

ii) 課題

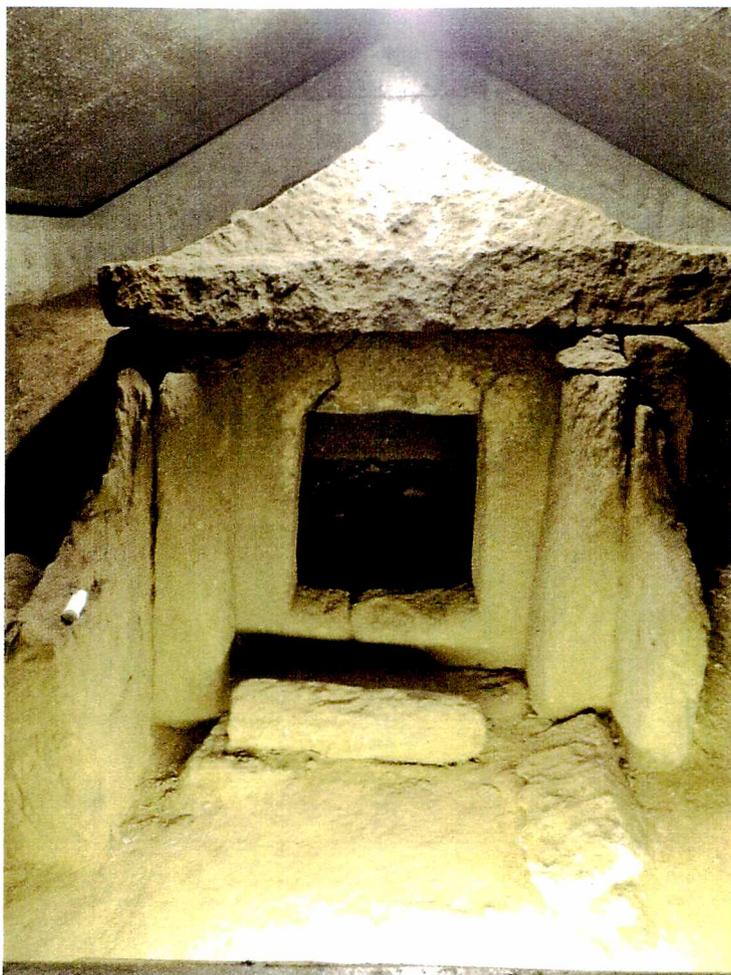
石之室古墳は覆屋を解体せずに石棺を外に搬出することは難しそうである。また、スペースの狭さから覆屋内で石棺を組み立て直すのも現実的ではなさそうである。覆屋が受けたダメージの程度も関わることであるが、石棺を修復するために覆屋を解体するとなると、その後の復旧・展示方法や必要経費が大きな課題になると思われる。復旧・展示方法については、現状が地震に弱い構造であることも考慮して検討する必要がある。

石棺に使用されている凝灰岩は柔らかい石材であるため、倒壊に伴って損傷をかなりしていることが想定される。装飾部分も含めて、それをどう修復するかも課題となる。

4. おわりに

多大な被害をもたらした平成28年熊本地震は、多くの文化財にも深刻な影響を与えた。熊本城は今回の地震被害のシンボルの1つになっており、その復興が熊本だけでなく全国の関心にもなっている。また、熊本城やここで報告した古墳以外にも、地震によって深刻なダメージを受けた文化財が多く存在している。このような大災害では、当然被災者の生活の再建が最優先の課題となるが、文化財の復旧も同時に取り組んでいかなくてはならない問題である。

まだまだ古墳などの文化財は復旧の端緒についたばかりで先は長いですが、この研究会により被災古墳・文化財への関心や理解が得られ、復旧が進む一助になればと祈念しています。



地震前の石之室古墳の石棺



地震後の石之室古墳の石棺

注

- (1) 国登録を含む。また、無形民俗文化財など地震による損傷が考えにくいものもある。
- (2) ただし、発掘調査が行われて正確な墳形、墳丘規模が判明していないものも多い。

引用・参考文献

- 乙益重隆 1967 「装飾古墳の修理—熊本県釜尾古墳—」『月刊文化財』第 49 号 文化財保護委員会、東京：pp. 31-35
- 清田純一編 1995 『史跡・塚原古墳群—保存整備事業報告書—』城南町教育委員会、熊本
- 高木正文編 1984 『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会、熊本
- 寺本直廉 1784 『古今肥後見聞雑記』
- 豊崎晃一・清田純一編 1991 『塚原古墳群調査報告書—史跡・塚原古墳群整備事業に伴う調査Ⅲ—』城南町文化財調査報告第 7 集 城南町教育委員会、熊本
- 濱田耕作・梅原末治・島田貞彦 1919 『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告 第三冊、京都
- 松本雅明編 1965 『城南町史』城南町史編纂会、熊本
- 森本一瑞 1772 『肥後國誌』
- 八木田政名 1841 『新撰事蹟通考』